SATSUMA×WORK

さつま×しごと

Vol.10

手漉和紙×野元政志

野元（のもと） 政志（まさし） さん（68）

神子地区出身。宮之城農業高校を卒業後、石油会社に就職。その後、商社に転職しイタリアで２年間勤務。県内の観光会社に再度転職し、ゴルフ場の支配人を務める。42歳で脱サラし、家業を継ぎ、現在は３代目の母・八千代さんと叔母の玉利豊子さんと伝統を守る。

▼ざぶ、ざぶと紙を漉（す）く音が響く山間の静かな工房で、１００年以上の歴史を持つ鶴田和紙は作られます。神子地区にある鶴田手漉（てすき）和紙工房は、県内でわずか2軒しかない昔ながらの手漉和紙を制作する会社の１つ。ほとんどの工程を伝統的な製法で作ることから、鹿児島県の伝統的工芸品にも指定されています。

▼工房の４代目として伝統を受け継ぐのが野元政志さん。元々サラリーマンだった野元さんは、長女の小学校入学を機に42歳で帰郷。３代目である母・八千代さんの指導のもと本格的に紙漉きを始めました。「要領は分かっていましたが、最初は均等にならずうまくいかなかったですね。それと尺貫法に戸惑いました。お袋は重さの単位を『何貫目』と言うけど、どれだけ入れていいか分かりませんでしたね」と笑います。

▼鶴田和紙の原料は、カジという植物と糊（のり）として使われるトロロアオイという植物。どちらも自家栽培しています。11月頃までに原料の準備を済ませ、寒くなる12月頃から紙漉きが本格化。「お袋は最盛期だと１日で３００枚ほど漉いていました。昔はほとんど障子紙として使われていましたが、今は賞状や焼酎のラベル、茶とり紙として使われています」と説明します。

▼野元さんは和紙の魅力を「丈夫で長持ちすることが一番の特長。それに手触りが良く、暖かみを感じますね。同じものがない一品ものです」と話します。また、八千代さんの代から続けている子どもたちの紙漉き体験について「和紙について知ってほしいですし、和紙に限らず伝統工芸に触れるきっかけになってほしいですね。なにより子どもたちの楽しそうな笑顔を見ると、こちらが元気をもらいます」と目を細めます。

▼同工房では11月から３月まで、５人以上の申込みで紙漉き体験を行っています。予約は電話０９０（８２２４）２３６５まで。

原料をすくい水を切る簀桁（すげた）。

３代目の八千代さん（右）が見守る中、叔母の玉利豊子さんも手伝っています。